

会)など、ゲーム開発者同士が議論をぶつけあい、切磋琢磨する場が数多くある。日本はこのままでは取り残されてしまう、という危機感を緒方は持っていた。彼にとって3D野郎大会は、GDCのミニ版に見えた。だからこれをコアにすれば、ゲーム開発者向けの国内イベントを立ち上げる可能性は充分あると踏んだのだ。

そして数ヶ月後、緒方はCESAの技術委員会を説得し、非公式に国内のゲーム開発者技術交流会の準備会が設置される。東京ゲームショウを命名したコピーライターの福井善行が、「CEDEC(セデック)」という名前を決めた。CESA DEVELOPERS CONFERENCEの略称である。僕と森はCESA内部に設置された非公開組織、CEDEC SWATに招聘され、具体的なプログラムを考えることになった。CEDEC SWATは緒方が名付けた。ゲーム業界に切り込む特殊部隊というわけだ。とはいえ、現場で現在進行形でゲーム開発をしているのは僕一人。最初のプログラムの半分以上は僕が企画することになった。

大半は3D野郎大会のメンバーを招く形になった。そこに一つ、本格的なコンピュータグラフィックスの講義を入れよう、と思つて、ダメ元で提案したのが、西田友是にしたともゆきだつた。そのとき、彼は東京大学の教授をしていた。

西田友是との出会いは、偶然だつた。僕がレーザーファイブという秋葉原のCD-ROM販売店で偶然購入したCD-ROMは、東大のコンピュータグラフィックス講座で使われている

教材だつた。その教材の出来が余りに良かったので、これはきつと解説をさせたらピカイチの先生なのではないかと思つた。

しかし、オフアアを出す直前、僕は念のため西田友是についても少し調べることにした。すると、とんでもないことがわかつた。

彼は僕が東京に来て最も衝撃を受けた本、『Computer Graphics: Principles and Practice』に論文が掲載されるほどの、本物のコンピュータグラフィックス研究者だつたのだ。

しかもラジオシティ法という、現在のコンピュータグラフィックスには決して欠かすことの出来ない表現手法の発明者でもあつた。これはとんでもない先生にお願いをすることになつた。しかし、CESAの事務局は特に考えもなく、西田にメールを送つたところ、とりあえず会つて話は聞いてくれる、ということになつた。

西田は、これまで自分の功績は国内のゲーム業界に無視され続けてきたと愚痴を言つた。

「ほんとうに私の研究などゲーム業界の方が聞いてためになるものなんですかねえ」

西田は疑つた。

「以前、ゲーム会社に私の方から共同研究を持ちかけたときは、けんもほろろだつたものですが、」

「西田先生、今こそ先生の知見を日本の国益に活かす時です。ぜひ、CEDECに登壇して下さい」

いー」僕は断言した。

実際、西田友是のセッションはCEDECで最も高い評価を受けた。西田友是はとんでもない研究者だった。SIGGRAPHという、世界最高峰の国際学会への論文採用数は日本一、紛れもなく世界最高の研究者だ。僕はこのときから、「いつかこの人を雇わなければならない」と感じていた。

それは14年後に実現し、西田はUEIリサーチの所長となった。西田が率いるUEIリサーチは、初年度で26本もの論文が国内外の学会に採択された。一夜にして世界最高のコンピュータグラフィックス研究機関が出来上がったのだ。

こうした経緯で開催されたCEDECは、大成功だった。現在、CEDECは毎年5000名以上のゲーム開発者が参加する、国内最大のゲーム開発者イベントに成長した。

金のためでも、名誉のためでもなく

夏、専門学校は休みで暇だなあ、と思ったら森から「バイトしないか？ 本社まで来てくれ」と連絡があり、笹塚のマイクロソフトまで行った。

本社の会議室に通されると、森とスパーンがニヤニヤしながら座っていた。

「実は今度、セガから発売される新しいゲーム機にDirectXが移植される。そのデモを作って欲しい」

久しぶりにプログラミングの仕事だった。いいですよ、と引き受けようとしたらとんでもないことを言い出した。

「2週間で作ってくれ。200万出す。できれば2本作って欲しい」

途方もない話になってしまった。まず、いくら本が書ける程度には詳しいといっても、見たこともない機械の開発環境を覚えて、2本、しかも3Dのプログラム、モデリングとテクスチャまで一人でやる。どうすんのよ。物理的な作業量が足りない。

「サウンドの音源だけはこつちでなんとかするから」

サウンドまで面倒みなきやならないのか。僕は普段サウンドはいつも後回しにするのであまり得意ではなかった。

「どうする？ やれるか？」森は聞いてきた。

その目は、ギラギラと輝いていた。その目には絶対の自信が宿っていた。

このとき僕は思った。この人は、もしかして、僕のことを解ってるんじゃないか。

僕の気持ちは実は全部見透かされてるんじゃないか。僕が実際にはそんなもの、1週間もあればできるって思ってること。勿体つけて、もつといい条件を引き出そうとしてるってこと。



生就
職Name": "Listener",
articles": {
"event": "enterframe",
"fold": "-",

21

広島修道大学図書館



007.64
Sh 49
1500004755

晶文社
"zigzag": "X",
"padding": "144"

constructorName": "displayBlock"
variabl
"app
"int



ISBN 978-4-7949-6886-9
C0095 ¥1500E
定価: 本体1500円+税

"constructorName": "FrameSequenceBack",
"variables": {
"sequence": [4,
"times": "2"

fold": "-"
age": "c
avior":